

## 柴孝夫先生の名誉教授記念号に寄せて

経営学部長 教授 具 承 桓

柴孝夫先生は、2020年3月末をもって、京都産業大学を定年でご退職されました。先生が本学に着任なさいましたのは、昭和56年4月本学部に講師着任後、昭和60年に助教授に昇任、平成4年に教授に昇進されました。

本学経営学部において39年間教育と研究のみならず、大学役職を通じて、本学及び本学部の発展に大きく寄与されてこられました。その長年の功績により、先生はご退職と同時に京都産業大学から名誉教授の称号を授与されました。それを記念して本号は発行させていただくことになりました。われわれ関係者一同、大きな喜びを感じているところでございます。

柴先生は、昭和25年3月神戸市で生まれました。先生は昭和48年に甲南大学経営学部経営学科を卒業された後、昭和53年に甲南大学大学院社会科学研究所修士課程修了、昭和55年に大阪大学大学院経済学研究科博士後期課程を満期退学されました。昭和55年4月より1年間大阪大学経済学部助手を務めた後、本学に着任されました。

先生のご専門は日本経営史の分野です。

とりわけ、戦後初めて世界トップの地位（1955年）に君臨した造船産業を研究対象にしています。戦前、戦間期の主力産業であった日本の造船企業が危機的な状況や経営悪化の中で、そのように撤退を図るのか、その背後のロジックや企業行動などに関する研究が主要テーマです。「川崎造船所における明治30年代の拡大運動」（昭和53年11月、『甲南論集』第6号）を皮切りに、「金融恐慌時における経営戦略の破綻とその整理—川崎造船所の場合」（昭和55年4月、『経営史学』第15巻第1号）、「不況期の二大造船企業—大正後期の三菱造船と川崎造船所」（昭和58年10月、『経営史学』第18巻3号）などを執筆されました。また、造船企業の生産システムや他の産業との比較分析、日本企業の生産システムの特徴及び現場マネジメントなどに関する業績も残しています。たとえば、*The Evolution of the 'Japanese Production System': Indigenous Influences and American Impact* (Jonathan Zeitlin and Gary Herrigel ed. *Americanization and its Limits-Reworking US Technology and Management in Post-War Europe and Japan*, OXFORD University Press) などが挙げられます。近年では、事業存続、撤退戦略、新事業創造をめぐる企業行動と最高意思決定者問題にまで至るようになりました。ご退職に至る時まで、現場と学問の両視点から迫力のある研究業績を残しました。分担執筆を含む著書の論文14編、訳編2編、論文38編、研究ノート4編、書評5編、その他（辞書など）8編、監修4冊などの業績を残しました。こうした勢いのある研究業績から、昭和63年3月、一般

財団法人村尾育英会から、神戸・兵庫にゆかりのある学術研究および研究者にその業績を顕彰する村尾育英会学術奨励賞を受賞されました。

「経営史学会」と「社会経済史学会」を中心に、精力的な研究執筆活動を通じて学会の発展に貢献されました。先生は『経営史学』編集委員（平成元年4月～平成4年3月）、経営史学会監事（平成5年1月～平成8年12月）、経営史学会常任理事（平成9年1月～平成12年12月）、社会経済史学会評議員（平成10年1月～平成30年12月）、経営史学会常任理事（平成15年1月～平成18年12月まで）、経営史学会監事（平成29年1月～令和2年12月）などを歴任しました。また、「企業家研究フォーラム理事」（平成21年1月～平成23年）も務めました。

一方、教育の面におかれましては「日本経営史」を中心に約40年間教鞭をとられました。その間、多くのゼミ生を輩出し、社会に大いに貢献する弟子を育てられました。熱い教育の背景には、教育に対する志だけではなく、企業現場の動きに対する鋭い洞察力と、高水準かつ持続的な研究と業績が支えてきていたと推測します。

また、教学の面におかれましても、経営学部と本学に大きな貢献と功績を残されました。経営学部長・大学院マネジメント研究科長（平成17年4月～平成21年3月）、副学長・理事（平成22年10月～平成26年9月）を歴任しました。1学科だった経営学科を時代の流れの中で、企業や組織が抱えている社会的問題を含めてのマネジメント、企業の社会的な責務や使命、ミッションなどに関する議論を踏まえ、3つの学科に分離し、多くの教員を確保し、新しい経営学部としての出発を図りました。現在の経営学部の風土や考え方、教学体制の基盤形成を形成されたのもこの時期からではないかと思われます。

ここで、小職が講師として着任（2003年4月）後、新米だった時期に経験したエピソードを言わせて頂きます。

先生は常にイノベティブなことをやってきたと思われます。若手の話に耳を傾けたり、他大学や海外大学へのベンチマークをしたりする先生を記憶しております。ビジネススクールやリカレント教育問題が話題だった時代です。先生と一緒に、韓国のソウル大学をはじめ淑明女子大学、理科大学などを訪問し、社会人教育やそのカリキュラムなどを調査したことを昨日のように思っています。その際、大学と教育とは、知識とは、先生の役割とは、先生と学生との関係性は、学部の組織は、教員のモチベーションとは、合意とは、経営学とは等々、さりげない若手の疑問や悩みなどに対して様々な視点からアドバイスや高見を下さいました。

振りかえてみれば、飲み会や食事会の時、プライベートから業務の悩み、一教育者としての悩みに真摯に対応して下さいたことを今でも鮮明に思っています。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、柴先生、これまで大変お疲れ様でした。小職を含め、ファカルティー一同大変感謝申し上げます。大学と経営学部のさらなる発展を目指し、努力して参りますので、応援の方、よろしく願います。これからもますますお元気で活躍されることを心より祈念いたします。大学で会う機会が減ったことは大変残念ですが、コロナが落ち着いたら、盛大な先生のご退職記念

パーティを行いたいと思います。たまに神山の緑が懐かしくなったら、いつでも声を掛けてください。  
柴先生、39年間大変お疲れ様でした。

